生駒才菊

二

特別
ロ9
3908
2

門 ロ 9
號 3908
卷 2

昭和二八年
三月十日

真盛四方菊 巻之二

博愛堂西五丁目

金瘡或かどこしてこれをもたのしむべきなり
もとこれのぞくるのたのしこ
さまらハ和醫者の婦人書をれこれる人極ハ
故かぐこれつり紙底の奥極
改り

先刑ア之盜人の劇すぐこと醫学をつんで療治をあさ所時ハ
新中小刀をもつぬ鼠ゞ半小ある時の氣をなる用ゆるんと
者方先生乃方ゆて学文をもい時一打小ハ指ゞ腐を居ハ来
て醫家お意の孫しい実病を考うくハ紙さるぐさて雑
らゆ和又移去とのぐまもて。江戸の町宅ゆて有治近門と

子源人にしかし子細ありて金銀銭沢山に小物屋らうそし。
妻女ハ先づ大坂伯のうちゆて請出せしに女房とな妻に
なるべしかくぬ人時言をもんそよりて仕度のうちに銭ゴ祖
の氏子ゆゑハたじしれど門房ハさもなき所南新ゆて病用
よ沢醫家の始しこたくく。七八年の白ゴ後居二人白ゴふ
伯姉下女下男にいてこ年で。後のうちゆて請出せし女房と
いるゆハ病かどこ考ゑ。お入の商人ハ粉こうのうり見雑
につこ源して有こをまぐも人ふここ色じと打こ初ゑか
ゆ。近門ゆ房所ふ云ゆ人教らるゆハ人接接伯の居を頼ゆ

家ふて。幼より乳母そぐちふ月ゆる沢飯をとくこ。伯ゴ後
せ茶の湯書ゴるどを教ゑら色ゴ。性得宗用ゆる女ゆ。
伝義云小通一ゴ人へ初き義ゆ大坂ゆて後家ゴりしてお強
の下女を抱てけのあせ一ゆ。計仕ゆも人ゆこにお居ゴかみ
結ゆも見こを育て。所信お云たれゴ月そを接女のうりこり
とハ月ゴ夫とゆこに仕度のゆ家ゴ。ゆも稽氣打こ後り
しゆ頭痛ゴ病こせ一ゆ。ゆつゆふて茶こり後を用てゆく
と療治ゆれども。打こ病ここり要ゴ。ゆ時十月居ゆ一人後
のこり醫ゆつこゴ。樂居稽安と自名後身後の面白イ
氣質ゴ一と邪氣欲人ゆく。芸兆沢さ人放ゆ人誠治江戸

中よ今一人養てのきさぬよ療治料ゆて大ぶんの損義を受ても貯蓄りをきうい貧窮者小金銀を殺しつ
身ハ酒を友として一生を空妻てくす人の身命ハ短不
意人も仍ぶんがくを仁和尊ハ宿病あいあれどこ千年ハ
見へ宮殿を感を白髪坊主のくまを指病の影ハ痛ハ
減まて一代樹を切るの名人西人道円俊療治を彩まき
仍てこれ近所ハ療治を彩くこ時をきよ必だまと
宅へ仍ハ神てあれば玄関まて来ませ仍婢ばあて
憂を的ー者ハ楽若狭安とー者ハ遊円桂四
て市内宮の内療治を彩西人ハ和尚ままことつ

こらきてもこれと有ハ仍婢ばを勇人所ー宅ハ
さと弱ふ用後ぶ玄関へ和近て見ハ若くの不吉若方
小示ふ有ふまとぶつくーの見ふ多くーその接接そ
見夫近所者来ハ和ぶさ狂加ーのさくさ重まてぶいく
きー後ーぶ若号ぶぶ療治ぶきまて下さりませぶの
この内療治ハ彩病でもちくおたるまをう必てかぶむり
へも減をおたてあるとる必反まーぶ指ぶーバ見へ寝
まで万雑りませてぶたれで桜とちよとそよ重ぶを指
てとよとふぶ仍婢ぶ桜ぶ二重の一重ぶ減も
つて来るので漢ぶのまて奥をうん後せバ万もぶのさふ

あのあんまの
ちっとまつたらよいの
アがてー
こまりしまらんあらんこれについていまいれ

すくなき男子の亭主あれバ。おのくへ医さぬともとまりなと。
獨安がそんゆさ。指を神そのまうすあれバ。かくいのんと
ハましうま此門戸ハ枕をまくそ。つのをむさふにふしける時。
独娼ハ去用手の仕さし。気をせいそ奥へ行さぬ。複を
ひろうをすゑめて入しが。獨安を閨戸の後へまを入じ
ての本くいのん。毒薬を調合せしに。堕胎の法を行ハ。色欲大
酒虚談戯らく読でかりふをせざるすせん所のおいそ
製紙を書。医祖神ふちくるをれバ。ぬまで有女君気結
一切ふをいてうつかましおうすハ。医業の才一般たしかなく
く療治せし人ふそと。婦人の緒よ人あさ財。孫腹戯

月ぐめが法ぼして此女ハ。神その紬手亭主も見られうすらぱ人と偽ふ
むうだ。複をもうしての此新ハハテ一層くの門戸ハ調合ぬぷ
婦人とあるする紬之へむつとせし。が此息を求めそされど
百戯ィの女中の逆るの年でるる男氣を一人呼てたべと有
ぼ閨戸まさんつがず。行の法用で病発りましぬ。そるハ去用于
まそ二人の女子とも八まうぬ孫ます二人の男一人ハ是非の
作ふさんしまず今一人ハ侈まをしほさがあとい子前獨安ま
らぶゑそど人の門家を療治いをし。孫ちろうんまず時。俺は
一くつので病発ぬ孫が横ず戯んすあせぬが医者の立で方軽り
ますぞ孫んのゐも郷まで独娼前ろうりと。偽ふあられまぜと

真白になつて。おしまへにかくれしが。見伐。つくづくと思ひ
ヲ、おつしおとけなるものにお醫者さましやおまへが一けんしか
きつてもつてこしが気をいかにしてあるハいくとぐる思ふをれど
何卒嬰が褒状細角小明ケ奥様何て内緒りまへ全く安食ほと
お醫者様のゐるで。内緒りましたが今ことしの御枕代おて着
ほしき時ハこしどの○にしても世中あつく人へ参ていやさまき。
と小糸に成て。おかまへされバ。おとこのなら都くいやげされ
きちがい。ならぬのへ白なる醫者様でも。場様と具ながと
ふかや。奥様のお心も切なりまへまるお気をつかいなしなる
アいくく　おはしと云ふと二人がさめとの立ひ絶。第家指安

出奔して。療治をせんとかげて始り。母身こ入りて出る遠の
情を悲しく思はれしが。両親目付にあつかつて。ぐれましくれる先
ハ来年は。お大坂より出し小店の身代なが済のうちに
女房とのふる事。近円が請をし大坂で。三番羅をも持ち
他へ乗し示叔つて居る男。近円方もお濃くなる気を持
醫者の娘によくそそられしが。醫家書に目ふ取くならぬ程
の所へ二ツ気が鉢ぐる折に大坂語の門の女房にいける由も
請へ向ふより出し一足ハ醫者も都人の知りふ有り
ませぬよ。先お菓子でも酒ありけれく

(三)

煙焼の行るの通用が… 亭主の悦

浴り むりかーでも言葉の利益ゆるふ成さる鳥子の示唆
ア 是い書面が付るパよく かどけ 鶏が鳥子ゆ成ます事るの。
扨書面てゐひ出ー海書くる。樂が考さ時ゐ小面祭者歩を
ゆふ。醫師来宝より上がえ完りて。ゲ乃薬を行られしるる
藤用の外世ゆ系絹よ資的るる仕加。京師の都人よ旅
ゐれて。より嫁入の嫁を書こりる。書ゆの世信を安きこり。ゐん
ゐ之の仲ゐ書ー。家のすいきよ。扨小かのの口入ゐ書こ書
ゐくゐの名人よて十ゆ牛よ藤治よ行門く多ゐる門
徒のかゐてよく成て。業弟を懐より安ー。一人徒かゐ二
人ども扨く事あゐとの。信よゐりて考りかゆ。小神

孩織家内ゆこゐよ書ゐれゐゐ。ゐ八三人ゐれと何を也女の
子少て。男子一人もゐ紀母ゆ十ゐよ成婦姑よ田舎の郷士
百性ゐり。聟を元ー。ゐを業歩と改ゐる。ゐー八丈三ゐ
れど生涯語道我好ゐ。ゐ子徒の附より。醫学に
ゐざー厚キ友ゐ歩よ者ー歩の見ゐより。代孫ゐも者ー京
浪りし更人書文書母の恢かゐりゐく。姑も中よく万結
ゐゐく高紀聟ゐりしゐ。百牛訓深ゐゐ根ゐ田舎
書育の正書ゐゐよ八ッの年小学を復ゐ文の年より。
大学我神。朱子学ゐ者て醫学の乃よ入ー妻ゐ成し
を福ゐゐゐく。更後を好ゐずーて年ゐゐ小ゐゐバ儒醫益

帝して行かけるに養父常安ハ剃髪の身なれば我ハ坊主
なく汝を嫁一生惣髪の医者ハ聟入およば婦人以の病対を
習り田舎に暮て粗末のもしゐ。山吹の花は酒一升んで
六十八九。腹程もなる痛を。五十歩斗古屋に持て来る聟
養子学の全体直。中く古屋を異見しける程なる。前を
つまらぬハ成れど此門へ入聟に来る甲斐何とぞして常安
常安老も養子の教の道へ手くめ入剃髪を出させ坊主にな
医者を惣髪にあらぬ稀ふ深まの也バ我が父上と教えぬ
也ん有。是ハ剃深きし上にて舅母や女房よりもずいぶん
あそぶ気まゝすでに至りしと思て身がけ時節をうかゞる

居けるが。父常安ハ又聟をむかえお後程にてより家ふ頼ハ養子
学成ん不けなきと云ど我二三の是ハ老。是なく二千余六
十に成までの間ぞ子供が習中に家てなすハ医じめいの外親父
不己んもる様子息子が。四十斗なりさ粗末じく成り。学文
好がいろの流より。蛮方文ぶしの弟と入るる様に成ん親が
剃髪の医者で居て息子を惣髪にして正月の礼を十
徳と上下とてハ世間がすまぬと三に余りハ剃深させて上て
嫁よも云ふくめ夫婦の者なりて成ませて坊主に天窓に
いつその程ハ。おもくとまての多すす。せん一生の癒り惣
髪にして重く云て名が五十歳という古屋の全身を

世が利うさちつとのろま亦ぐめふをてアんをんとの大拙ま
子多かい一年ばりも立る。扨し縁使ハを元組し仲人
といふハ常歩出えとり行るの朋友寄屋の松兵衛と
いつて。黒ハ振袖を高ふ男。高門ハ小祢ふして本中仲人を
ムがけ居る脇也や。欲ふるを小数ぶるを貧乏者歩行る
時夜ぶ行て松兵夫婦よ逢ちつがりと嘲ふるハ志成か
芸術の聲の義ふり。伊ぶかくを乳ふてきのどく中く毒迷
あの乳扨てハ。療治もを厚ず。拙ちぶ行ふ奇ふハ涙もすれ
どぬふふも聲一人して。療治を勧時ハ門傍の人まい蔵
て今面衆のちを毒。毒ふ小嫁ふハさて毒。家あのそこゞ

ぬけて歩でとしよ嫁ふも志れす。老拙も大ちさ山拙の拙ち
ぶ仕ふもてこうけハ。云あん面ん仕ふ。ついでふくとしうぶ
さん。療治中一毒りて今の聲志ふ。志ふ云ハ為年海
毒。嫁乳の仲人成ハ拙の口入書子の世伝喧嘩の行ふ
とぬけしぶ。松兵ぶ中云志ふ喧嘩の行ふ〳〵とも
行れます。見ハ世として行ふ海ふ嫁ぶ。されハ喧嘩
の行ふとハ。療治ふ嫁を乳ふ志ふ。始めと嫁と
火戦すつて中の毒ぬ拙。拙ふ育とれを火と聲ふハ門
ぶ入毒ふの面人治切鳥で始より嫁の多待を嘲ふ拙ふ
志ふけ。むりの肯ぶ戦ふく中迷嫁の親里ふたと毒て

ぬくとも。君家にうけてひとかたに行。舅親に逢そて姑のむりを云
るをかきうけて嫡室も左の世にきんがうせよくと
申されましたる。里へハ帰られず先にハ居られますまい。悪い女中
の世話いたし質く悪むよんなる事と仕おされ終て後悔
あそろく斗が。母家の他に叔るすぐに急する病人があつても一向の
ま〻至てハ。婚法が労咳病にあつうてハおくれて出来る薬用て
療治をする斗が医者の役であり升ぬか。扱ひをする事を
門外でお常々仰せよふつて人を救ふが。医者祖師よりの教ぞう
けし医者の勤と存ておもて御譲り仕る此。私の家
てやしてる事ハ。口がなりませぬぞへあまり気のどくさうなや

といふと。向の子さ親ハ手を合して。鮮哉もお医者に従がひおれ
仕ひ来代を古悲ハ忘れませぬ。御りよとかく取ほしき
と。言を手出しませふぞお気をかへ子ますかといふてこ
で父親の尊き口を突き難ハ夫婦の中よく。母しや人がおんの
かねと云りくとれもおてりといふ。父そうそおどしを鑑て
姑をおちくれこさきる中に子がお歳と孫の産て門がお
さある。梅縁の里ハ辛ぞ祈の中なる仕合お医者ハ。帝に
二人と有まると云て。病家を次ふに引付る是到法を
元の一つかれる筋にてふあんに。此門有附ハぞ之後妻を
嫁すうるなあり。母下に致さそて花く女子ふすまでさくてそく

あまり
あらふ
それハ
マア

通箱
それが
がくもんの

脇の毛ぬかるとハ鍼をするぶんかるふめきれて差うく子
ハちが抱てうるゐをちよいと刺られあのおぢれの鍼ハ祢う
痛おいていふと親ハ却も名人しやとつふりの。毛と立めきれ
と言せてかれ。まあ病人ゆと見ハ上うまう鍼をおー
ゑ人毛ー拾ぬきしず仕と言て。白紙紙かの鍼毛て〈色し
て見よんもきて却ハ鍼そう脇く仕合をうゆと鍼ふを
又病家へ引寄見らゞ醫ふの鍼ふつとゆ兵今拾ふう
門弟毛ふ毛ふ毛し芋ふくふ乳をも毛ぬハ年来見ふのふ
んうん友。見ハふふでき拓の口うまおの聲ふ脇の毛てふ
仕一義我お教ゆうふを夜初ぞうま寄り脇ふ却鍼髮てい

素人ゆ毛ー。鍼ふ天窓ゆ刺拓ふ見も脇ふ立て下
されと。ふうゆり毛せハ拓ふ乳ハ横ふ新サツテモ心中く
名ふ身上仕上ル人の愛的ハ。又格別傳手ゆふてを
見ふ後やの拓を拓ーくハ口ゆきかれぬ。仕の寄りむふ
ふ毛ハ差ふ寄して親文ふを寄きいふんくます。おれで二向
素人乳ゆ毛ぬ。のまり療治ゆ毛の法ゆふうーふ毛寄り
毛すまゆ的ゆまあ〈咋ます。てくと毛う拓ふとゆまて文ふ。
常歩ハ拓勝毛ーを新ま毛ふを文ふゆふ。却髮的舞の
茶歩を拓ふ清者へ咋て夕新常歩ふ少ーー寄りを毛ふ。毛に
坊主ゆふ毛毛毛ふ毛と。己ゆ欲毛ふ毛毛毛人も法鍼毛と

むかしむかしも良ふ悪ふをふくんで述りけるが。其ハむかし節松葉
我剃て吾父の垂髪を剃髪ふなそてそれらて相よ云てある
い。それより不孝行ますますおおくぬきさんせいもんませんと
云ふて居る是され共に吾父の名代と坊主まされとたびたび
して。眼力欲久の千歳の折ふし一生剃髪て居多ことの和
對に若仲人して仮の約を反古にせられ古人の教ハまもらざるを
席我たてかて主張すれハ。松葉清ハ悪さと打かつ酒は酔
と云ふ紳士に不人せうけ。めつきやたかふふけしく怒ひて仲人宵の
あらて以よひ後へをとられぬが。そこをとくとけてまん中ふ
坊様よたりあれ　コリヤ　あくまで粋な醫者めといふて不届をふ

つまりつめりしが。よふ了簡をしてねすいさん者めと。縋さしすわり
とめてさたり。松葉末の再縁ハ切身んと云ふ不たどふぞ祝言
ゆへ。談ずをたのつと聞て。ぬきさんをすふ急くり後の親となれ
とする。ここに吾父の形を云受せ。家お續のりと勤る仲人さ
ぬきさん家内不まるいぞれ共。尻つめるハたるむれそれはまつへし
きるあへバ。かぜくうらしありと云ふて後とあん。松葉清か日光
あんて後をめたれバ。まそ。命に別条なし。ぬきさんふおそれう
うる人ほと汝も命がないが。短慮の二字を能すれ身體
髪膚受之父母不敢毀傷孝の始也と。曾子学の
第一とごまんでありしぞ。ぢ得とくる息子よ剃髪して吾父の

教ふをれずバはぢもなき時ハはぢ恥ぢで今後我ごゝ教
別たも後切サア思言サアくくと諸考れバ。若気のむ
づかしき流ハ学者。ぶ語よゆゝいろく。行ろいろん縁を
のゝ水所ゆゝ有。後。悪賢をり。ゆどゝ盛のもゆゝ
くさく切。水ゆゝ頼をもみ和げ。おを果故ゆ若方をぐ盛
利たのむと在しゝるハ玄系の四ゝ偉よせまりゝり。あこれ
ゝそゝ細りつゝいゝハ書父の事歩ゝも業歩の行学法
ゆゝ実ゝるをゝ醫とゝゝれ。家各お後永久ゝハ
弟子の教ゝゝゝ種ゝり。れ各ゝ原ハ格別ゝゝゝと
れく収まゝ。ゝかたゝく

真盛四方菊　巻之二終

山本